

第 章 考察

製塩土器について

はじめに

西分増井遺跡では、15基の土坑が確認されたが、このうち12基から製塩土器が出土している。これらは、出土状況や土層の堆積状況からも、一括性の高いものとして捉えることができる。これらの土坑の多くでは須恵器、土師器、土錘、製塩土器と共に、多量の灰や焼土が検出されている。高知県において製塩土器が出土している遺跡は12遺跡を数えるが、遺構出土のものは少なく、今回の他には下ノ坪遺跡⁽¹⁾、具同中山遺跡⁽²⁾、小籠遺跡⁽³⁾をあげ得るのみである。

日本における製塩土器の初現は縄文時代後・晩期に遡り、関東と東北において知られている⁽⁴⁾。西日本では、弥生時代 期に吉備地方南部で土器製塩技術が成立したとされる⁽⁵⁾。古墳時代前期には各地に広がり、後期になると限られた地域で生産が増大する。『延喜主計式』に記されている塩の貢納国は十八国で、全て古墳時代後期までに塩生産を開始した地域であり、その生産体制と流通機構を基盤として、律令国家が調庸塩の賦課国として包括的に掌握していったものとされる⁽⁶⁾。本県では他地域でみられるような古代を遡る時期の製塩土器や土器製塩遺跡の確認例はなく、全て律令期以降のものであり、消費地遺跡であると考えられる。製塩土器は赤彩土師器や陶硯、施釉陶器などに伴って、まとまった量が出土する場合が多く、遺跡の性格と関連しているとみられる。古

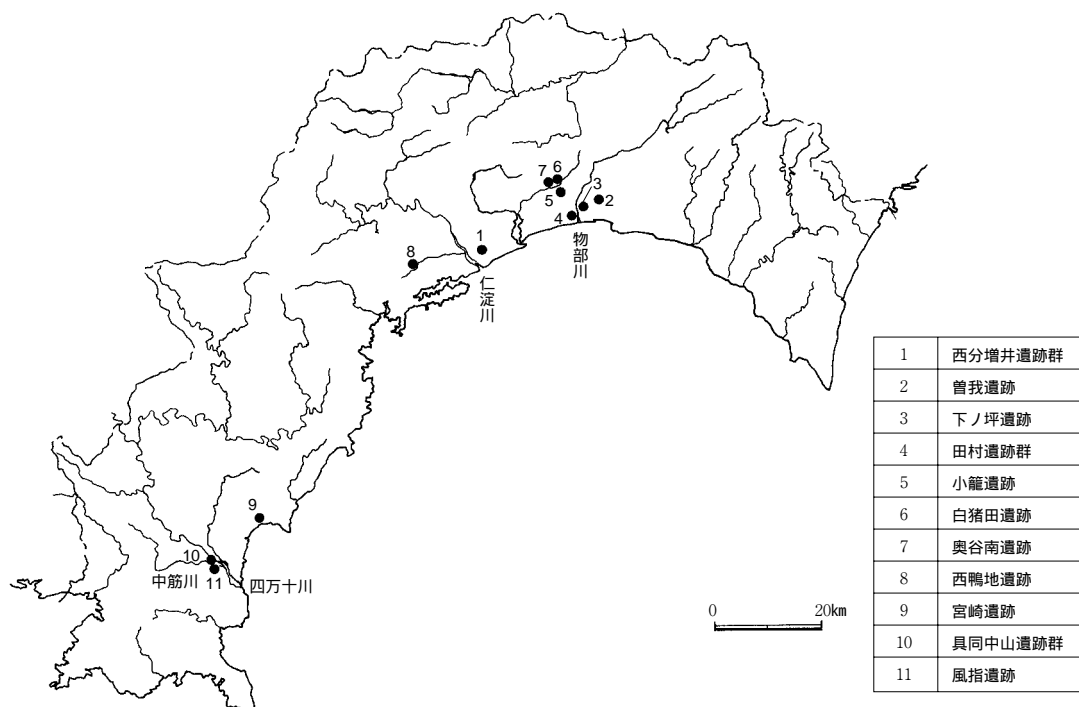


Fig.31 高知県の製塩土器出土遺跡位置図

Tab. 2 製塩土器出土遺跡一覧

	遺跡名	出土遺構	立 地	製塩土器		須恵器・土師器以外の主な出土遺物
				分類		
1	西分増井遺跡	SK1、SK3、SK5、SK6、SK14、包含層	新川川の左岸	A - 1 B - 1 B - 2	他多量	緑釉・黒色土器・土錘
2	曽我遺跡	SB6、包含層	山北川と香宗川に挟まれた自然堤防		体部片3	緑釉・灰釉・黒色土器・陶硯 赤彩土師器・墨書土器・土錘
3	下ノ坪遺跡	SB9～22 SA4、10、11 SK16、18、20～34 SD26、40 SX2 P14、15	物部川下流の左岸、 沖積平地上	A - 1 B - 2	他多量	緑釉・灰釉・黒色土器・搬入土器 陶硯・鉈尾・石鈐・赤彩土師器 墨書土器・八陵鏡・佐波理・篠鉢 土錘
4	田村遺跡		物部川下流の右岸、 自然堤防上			整理中
5	小籠遺跡	SK106、SK110	長岡台地の西端。古代以前においては汽水域に面していた。	A - 1		灰釉・黒色土器・瓦
6	白猪田遺跡	包含層	2本の河川と丘陵地に挟まれた扇状地		少量	
7	奥谷南遺跡	通路状遺構	平野を見下ろす山の標高62～73m地点		底部片1	緑釉・黒色土器・転用硯・篠鉢・瓦
8	西鴨地遺跡	包含層	波介川上流域に形成された沖積地	A - 1	他に口縁4	緑釉・灰釉・黒色土器・鉈尾・銅鈐 斎串・土錘
9	宮崎遺跡	包含層	猿飼川とその支流の合流部分、右岸。	B - 3	他に口縁部片1、胴部片3	緑釉・黒色土器・転用硯・刻書 墨書土器・土錘
10	具同中山遺跡 (1999年度、2000年度調査)	SK11、SK12、SK16 SK19、包含層(1999年度)、SX2、SX4、包含層(2000年度)	中筋川左岸の自然堤防上	A - 1 B - 1 B - 2 B - 3 C - 1 C - 2	他に口縁部片5、体部片1、底部片2	緑釉・灰釉・石鈐・銅鈐 土錘(1989・1990年度、1999年度調査分含む)
11	風指遺跡	包含層	中筋川右岸の河岸段丘上		体部片2	緑釉・黒色土器・篠鉢・土錘

代における塩の使用目的は、食用および調味料・食品加工用、鉄生産などに関わる工業用、儀礼・祭祀用などが考えられる⁽⁷⁾。ここでは、近年報告例が増加しつつある、県下の製塩土器の集成を行い、若干の検討を行う。なお、文中で用いる時期区分は池澤俊幸氏による土器編年に依った⁽⁸⁾。

1 製塩土器の分類

県下出土の製塩土器は、破片が多く、その全容を把握できる例は皆無であるが、復元可能な個体を用いて製作技法、形態、法量等から幾つかに分類することが可能である。

製作技法については、型づくりであるか否かで分類することができる。型作りであるということは作業効率を高め、量産化を図るという意味で塩生産の画期⁽⁹⁾と考えられる。内面に布目痕またはそれに準ずるような圧痕を有する個体については、型作りであることが確定でき、土佐においては、内面の布目痕跡こそが「製塩土器」のメルクマールとされてきた。しかし2000年度の具同中山遺跡の調査において、内面に布目が観察できない製塩土器の存在が確認されており⁽¹⁰⁾、当地においてもいわゆる型作り成形とは異なる方法で製作された製塩土器の存在が示唆されることとなった。

次に形態であるが、砲弾型を呈するものと、口径に対する器高が低く、概ね逆三角形を呈するも

のが存在すると考えられる。なお底部形態については、尖底、尖底気味の丸底、平底の、3種が確認されているが、どの上部形態に対応するものが、現時点では確定できない。

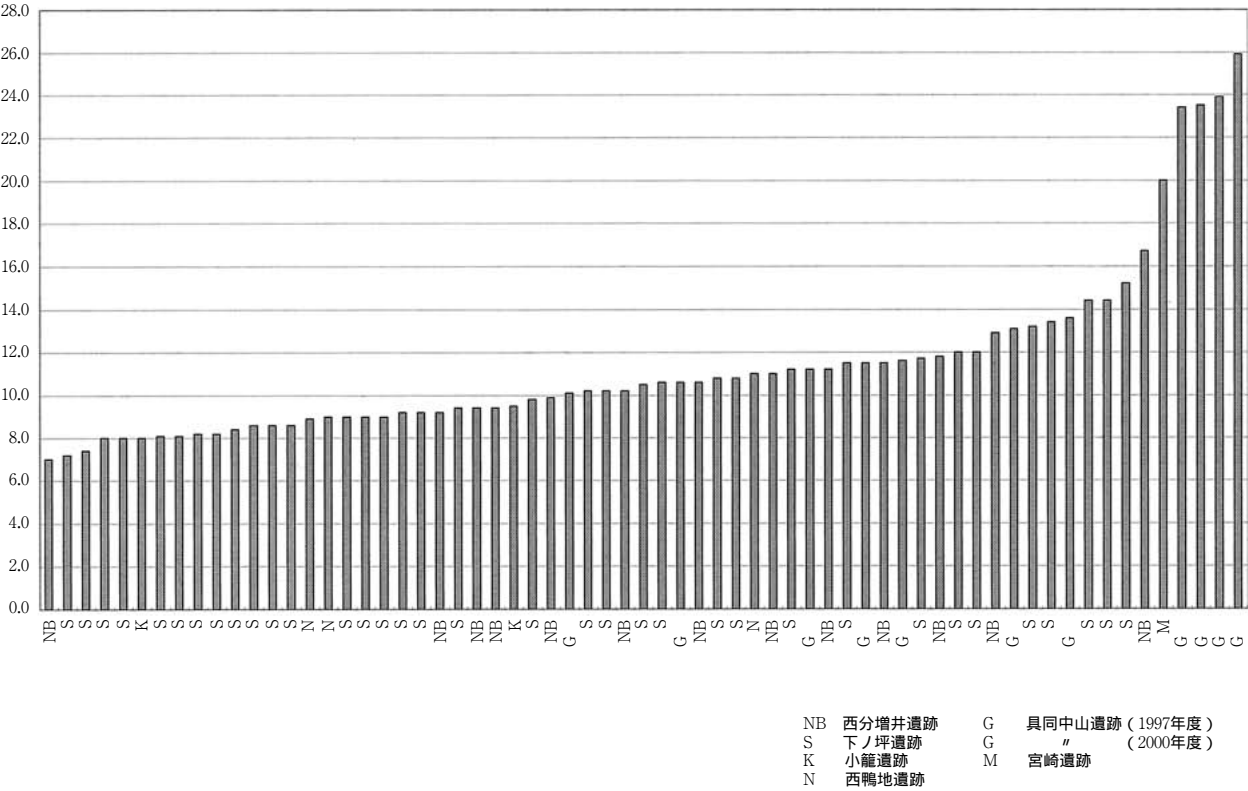
法量は、口径7～27cm前後までを測り、幾つかに法量分化が成されているとみられる。形態差を無視した口径のみの比較ではあるため、必ずしも法量差とはいえないが、7～15cm前後までは細かいピッチで推移するが、20cmを超える個体との間には隔たりがある（グラフ1）。

A - 1 類 型作り成形で砲弾型を呈するもののうち、口径7～11cm前後を測るもの。内面に布目痕を有し、外面には指頭圧痕が残る。口縁端部は斜めに切り落としたものが多いが、ヨコナデや指の押圧により歪むもの、波状になるもの等がある。胎土は素地が粗く角粒を多く含み、焼成または二次焼成により比較的堅致である。色調は灰白、橙、浅黄橙等さまざまであり、同一個体でも部位や、内外面により色調が異なるものが存在する。

A - 2 類 型作り成形で砲弾型を呈するもののうち、口径12～16cm前後を測るもの。他はA - 1 類に準ずる。

B - 1 類 型作り成形で逆三角形を呈するもののうち口径7～11cm前後を測るもの。他はA - 1 類に準ずる。このうち西分増井遺跡出土のSK 1 出土の1 点（Fig.11 - 19）は二次焼成を受けておらず、非常に薄手で胎土も精選され口縁部に刻みが施されたものであり、特徴的である⁽¹¹⁾。

B - 2 類 型作り成形で逆三角形を呈するもののうち、口径12～16cm前後を測るもの。他はA - 1 類に準ずる。



B - 3 類 型作り成形で逆三角形を呈するもののうち、口径20cmを超えるもので、器壁が厚く、胎土は素地が粗く砂粒を多く含む。二次焼成痕跡が激しく、赤褐色を呈し表面はもろく崩れやすい。表面の指頭圧痕が顕著である。

C - 1 類 型作り成形を示す布目痕が観察できないもので逆三角形を呈するもののうち、口径7～11cm前後を測るもの。胎土は精選された素地にチャート、頁岩の円粒を多く含み軟質である。色調は灰白、浅黄橙などである。

C - 2 類 型作り成形を示す布目痕が観察できないもので逆三角形を呈するもののうち、口径20cm以上を測る。他はB - 3 類との共通する特徴をもつ。

2 製塩土器出土遺跡

曾我遺跡⁽¹²⁾

野市町中ノ村に所在し、高知平野東部の山北川と香宗川に挟まれた自然堤防上に立地する。9世紀から11世紀代の企画性をもった掘立柱建物群、礎石建物、柵列、土坑、溝等が確認されている。土師器・須恵器の他、硯、二彩陶器、緑釉陶器、灰釉陶器が出土しており、中でも緑釉陶器は45片を数え、県下最多点数である。遺物と建物跡から「官衙的な色彩」のある遺跡とされる。製塩土器は細片3点が報告されている。

下ノ坪遺跡 (Fig.32 - 1～32)

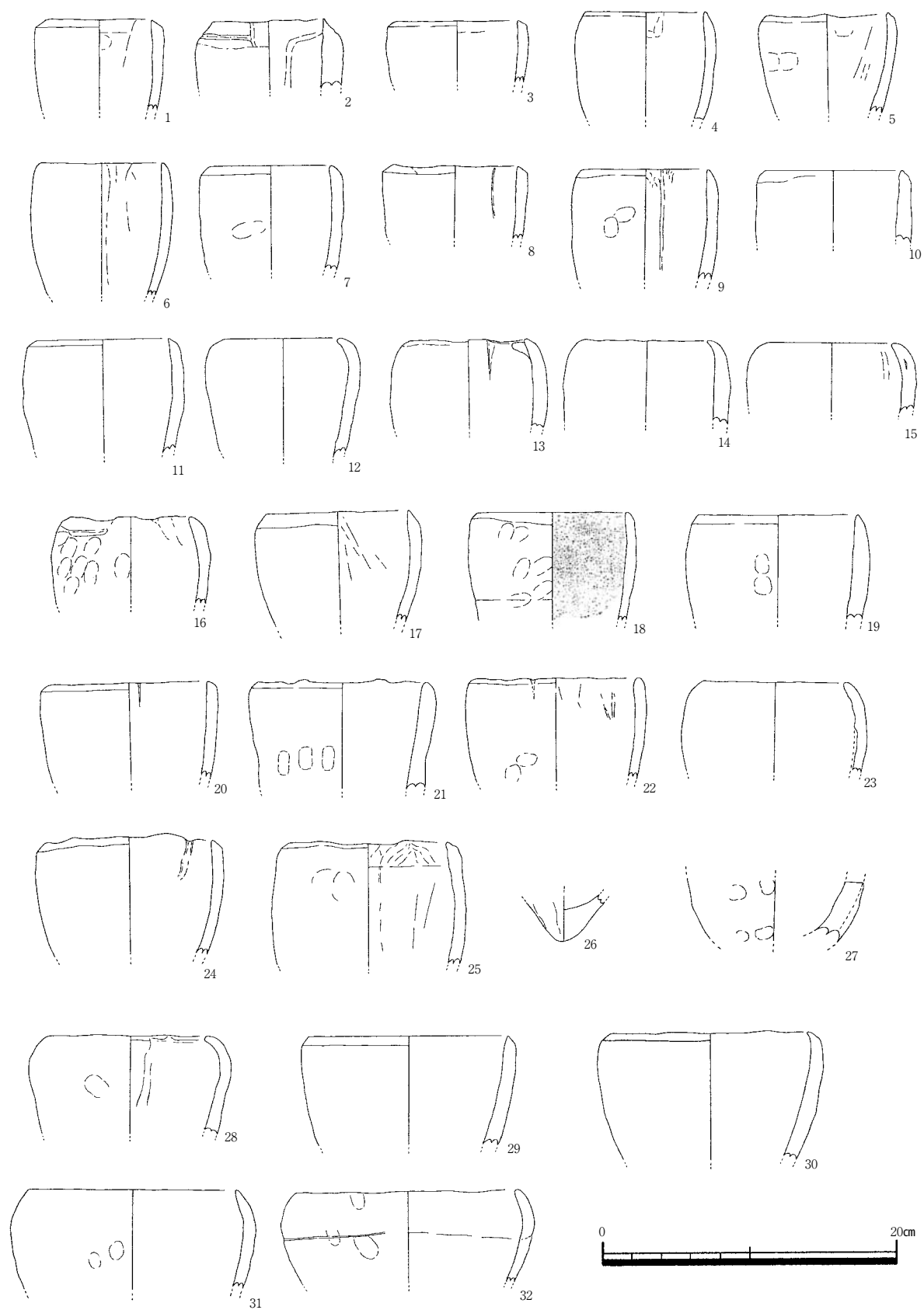
野市町上岡に所在し、物部川下流の左岸に位置する。弥生時代後期前葉・古墳時代後期・古代の複合遺跡である。古代では県下最大級の掘立柱建物群を含む、規則性を持つ建物配置による、掘立柱建物群が20棟以上検出されている。他に溝、土坑等も確認された。8世紀前葉から9世紀中頃に盛行する。製塩土器は13基の土坑 (SK16・18、20～22、27～34) の他、掘立柱建物、柵列、溝等、殆どの遺構から出土しているが、中でもSK28、SK34では製塩土器の重量が10kg近くを量り、突出している。また土錘、被熱石等と共に灰や焼土塊が廃棄されている土坑が存在する。注目される出土遺物としては四仙騎十獣八稜鏡、緑釉陶器火舎、各種搬入土器、革帯装具、陶硯、赤彩土師器、土錘、鍛冶滓、左波理があげられる。製塩土器はA - 1 類が29点、B - 2 類が5点口縁部、胴部片13点、底部片2点が報告されている。以下製塩土器が多く出土した土坑をあげる。

SK16 1.0×1.2mの円形プランを呈し、床面にはピット状の凹みを有する。深さは30～42cmを測る。焼土は含まれないが被熱・打割された大小の石が出土している。土師器・須恵器の供膳具および甕、羽口が出土している。

SK28 2.1×0.6m以上の隅丸方形プランを呈する。断面形はほぼ長方形で、上層の特に下半に焼土塊を多く含む。製塩土器を主とする土器は下半に集中している。製塩土器の総量は8.75kgである。

SK30 0.9×3.4mの溝状の土坑である。両端に段部を有する。完形を含む残存率の高い土器が面的に出土している。被熱、打割された川原石が出土している。

SK34 1.0×2.3mの不整形プランを呈する。上層に礫群を挟んで南に製塩土器が塊状に出土し、北に多量の炭化物が検出された。製塩土器の総量は9.49kgを測る。



A - 1類 : 1~25

B - 2類 : 28~32

Fig.32 下ノ坪遺跡出土の製塩土器

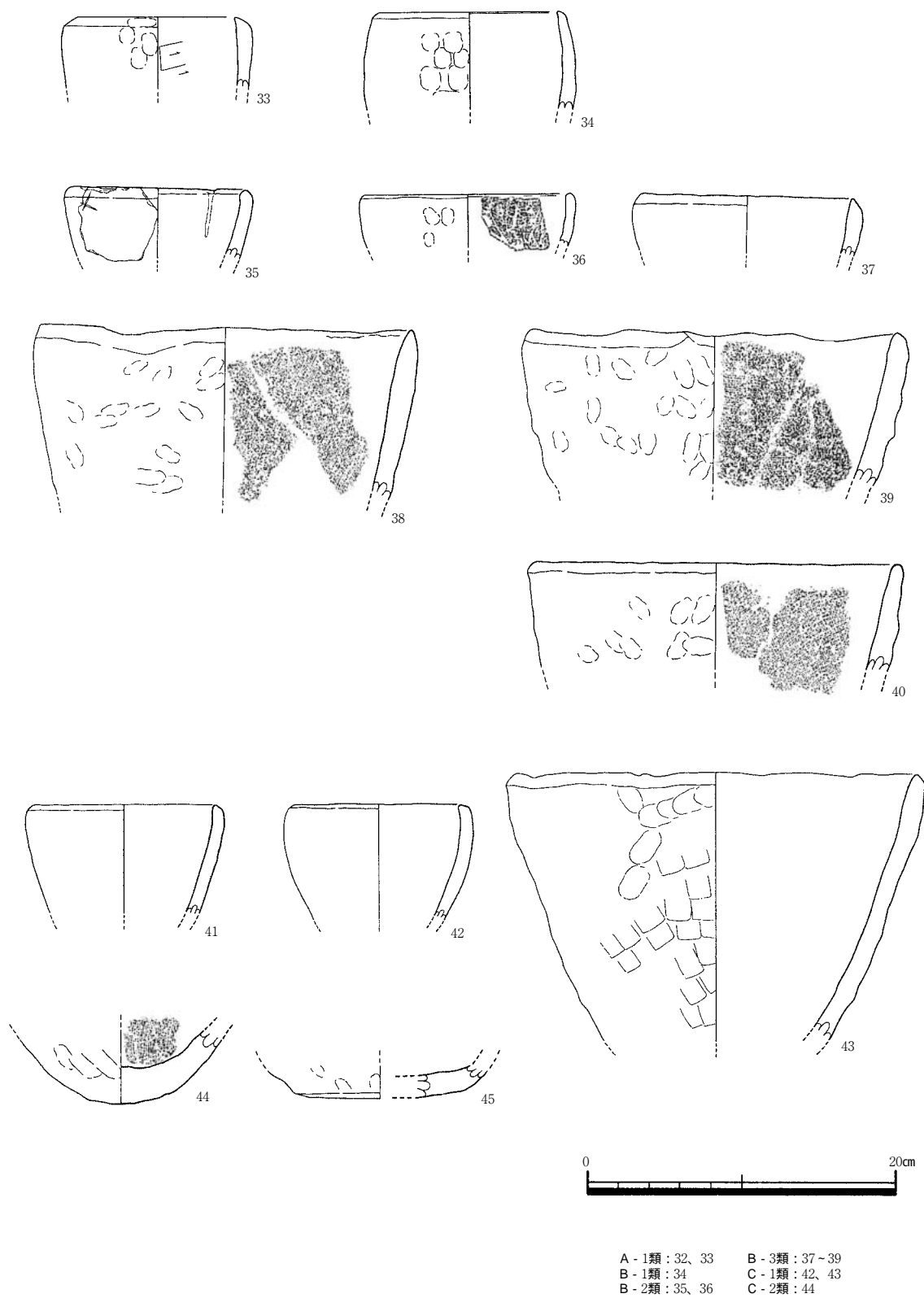


Fig.33 具同中山遺跡出土の製塩土器

小籠遺跡

南国市岡豊町に所在し、長岡台地の西端に立地する。弥生時代前期から断続的にはあるが、18世紀までの遺構と遺物が確認されている。古代では9世紀初頭から10世紀初頭頃までの土坑や竪穴状遺構、掘立柱建物、溝が検出されている。当地は古代以前においては汽水域に面していたものとされ、その立地と検出遺構から水運を背景とした「津」的な性格付けがなされている。土師器、須恵器の他に緑釉陶器皿、畿内産黒色土器が出土している。製塩土器は貯蔵穴とされるSK106、SK110の二つの土坑から各1点ずつ出土しており、いずれもA - 1類である。

SK106 長軸1.5m、短軸1.1mを測り、楕円形プランを呈する。深さ約60cmで断面長方形を呈する。遺物は土師器・須恵器供膳具と土師器甕が、集中して出土している。

SK110 長軸3.8m、短軸2.3mを測り楕円形プランを呈する。深さ26～34cmで断面形は皿状を呈する。遺物は土師器・須恵器供膳具、土師器鉢・甕、移動式竈の細片が出土している。

奥谷南遺跡⁽¹³⁾

南国市岡豊町に所在し、平野を見下ろす山の標高62～73mの地点に立地する。旧石器時代から近世にかけての複合遺跡である。10世紀から11世紀に盛行する山岳寺院と、その付属施設と考えられる須恵器窯、炭窯、通路状遺構等が確認されている。製塩土器はこの通路状遺構から底部片1点が出土している。土師器、須恵器の他に楠葉型黒色土器B類椀や、斜面部下方からは猿投窯産緑釉陶器段皿が出土している。

西鴨地遺跡⁽¹⁴⁾

土佐市西鴨地に所在し波介川上流域に形成された沖積地に立地する。自然流路からではあるが、縄文時代から中世に至る遺物が出土している。古代に属する遺物は概ね8～9世紀代のものであり、土師器・須恵器の他、緑釉皿・椀、灰釉皿、畿内系黒色土器、銅製帯金具などが出土している。製塩土器はA - 1類が3点と口縁部片4点と細片十数点が報告されている。

宮崎遺跡⁽¹⁵⁾

大方町加持に所在し猿飼川とその支流の合流部分、右岸に立地する。トレンチ調査でもあり遺構は確認されていないが、9世紀後半頃を中心とする遺物が出土しており、土師器・須恵器の他、京都系緑釉陶器碗・皿、黒色土器、墨書土器、刻書土器、須恵器転用硯、石硯等がみられる。製塩土器の中には刻書されたものが含まれる。報告者は、遺物から大方郷の郷家の周縁にあたる可能性を指摘している。B - 3類が1点と、口縁部片1点、胴部片3点が出土している。細片には刻書が施されている。

具同中山遺跡 (Fig.33 - 33～45)

中村市具同に所在し、中筋川左岸の自然堤防上に立地する。1986年以来断続的に続けられてきた調査により、弥生時代から中世にかけての遺構と遺物が確認されている。古墳時代を中心とする河川祭祀遺跡として知られる。古代では、1986・1999年度調査で、石製・銅製の帯金具が出土している他、緑・灰釉陶器もみられる。1997年度に行われた調査では古代の土坑7基が確認されており、そのうち4基から製塩土器が出土している。また2000年度に行われた調査では古代の土坑9基、性格不明遺構3基、炭化物集中遺構4基が検出されており、9～10世紀初頭頃の土師器、須恵器、土錘が出土している。製塩土器が出土したのは土坑6基、性格不明遺構1基からである。2000年調査

で報告者は、土鍾との供伴例が下ノ坪遺跡、曾我遺跡など他の遺跡でも見られることから「貢納用の海・水産物の加工生産に係る可能性」を示唆している。製塩土器はA - 1 類が2 点、B - 1 類が1 点、B - 2 類が2 点、B - 3 類が3 点、C - 1 類が2 点、C - 2 類が1 点ある。

SK11^(2a) 2.4×0.7mの不整楕円形を呈する。深さ12cmを測る。土師器・須恵器供膳具、土鍾及び3～5cm大の角礫と1～3cm大の円礫が多く出土している。

SK12^(2a) 1.2×1.1mの円形プランを呈し、深さ24cmを測る。土師器・須恵器供膳具、土鍾、鉄片が床面から出土している。

SK16^(2a) 1.7×0.8mの不整楕円形を呈し、深さ12cmを測る。土師器・須恵器供膳具、土鍾が出土している。

SK19^(2a) 0.9×0.8mの円形プランを呈し、深さ18cmを測る。土師器・須恵器供膳具、土鍾が出土している。

SK4^(2b) 1.0×0.9mの不整楕円形を呈し、深さ10cmを測る。浅い皿状で少量の土師器・須恵器、土鍾、軽石が出土している。

SX2^(2b) 0.9×0.5mの範囲に、須恵器杯と製塩土器が炭化物・焼土と共に検出されている。掘り形はない。

風指遺跡⁽¹⁶⁾

中村市具同地区の南西部に位置し、中筋川右岸の河岸段丘上に立地する。8基の土坑と20数個のピットが確認された。出土遺物から9世紀中葉から10世紀初め頃を中心とし、緑釉陶器、黒色土器、篠鉢、100点余の土鍾を含む。製塩土器は、包含層より出土した胴部片2点が報告されている。

今回調査された西分増井遺跡ではA - 1 類10点、A - 2 類3点、B - 1 類2点、底部片2点、胴部、口縁部片2点を報告している。この他、少量の製塩土器が報告されている遺跡としては南国市白猪田遺跡⁽¹⁷⁾、南国市田村遺跡⁽¹⁸⁾をあげることができる。

まとめ

上記の諸遺跡における製塩土器各類の出土状況をみると、まず県中央部では各遺跡ともA - 1・2類が大半を占めることがみてとれる。一方県西部では、具同中山遺跡や宮崎遺跡において、口径20cm以上を測る大型のものがみられ、具同中山遺跡においてはA - 1 類は少数である。A - 1・2類と分類した砲弾型で内面布目痕を有するものや、B - 1・2類の逆三角形で内面布目痕を有するものは、主に北部九州から長門で普遍的にみられる形態であると考えられ、焼き塩壺として塩の運搬時に使用されたものとして位置づけられている⁽¹⁹⁾。製塩工程は「煎熬」と「焼き塩」の2工程から作られることが知られており、古代製塩遺跡である福岡市『海の中道遺跡』では「煎熬用の甕である玄海灘式土器」と「焼き塩用の六連式土器」が認識されている⁽²⁰⁾。また岩本正二氏は紀伊地方の7～9世紀の製塩土器を四型式に分類し、9世紀前半頃までは「煎熬」と「焼き塩」は同一形態の土器で行われていたと想定している⁽²¹⁾。県下で出土している製塩土器は前述した西分増井遺跡出土の1点（Fig.11 - 19）を除けば、全て二次焼成をうけたものであるが、これらそれぞれの形態が、製塩のどの工程で使用されたかについては現段階では判断できない。

各遺跡の、製塩土器が出土している遺構を比較すると、下ノ坪遺跡、小籠遺跡、西分増井遺跡、

具同中山遺跡とも、一括性の高い廃棄土坑と考えられる。これらの土坑の平面形態、深さ等に規性はみられないのであるが、出土遺物に土師器・須恵器・土錘を含み、被熱・打割された礫を伴ったり、灰・炭化物・焼土を検出面や埋土に含む等の共通性がみられる。しかし下ノ坪遺跡におけるSK28・SK34の10kg近い製塩土器の出土は、西分増井遺跡の土坑のうち最も多く製塩土器が出土したSK3・SK5でも約1kgであることを考えると、その集中度合いに著しい差がみられ、特種なものといえるかもしれない。また大型のB-3類、C-2類が出土している具同中山遺跡のSK4とSX2では供伴遺物の少なさや、不明確な掘り形など、やや異なる出土状況がみられる。これらのことから、A-1・2類、B-1・2類とB-3類、C-2類は、使用工程が異なる可能性が考えられ、また大型の製塩土器が県西部でしか出土していないことから、地域差の可能性も考慮しなければならない。

次に出土状態における時期的な変遷を概観してみる。県下においては7世紀代前後の資料が充実しておらず、土器様相も含め不明な部分が多いのが現状である。その為不十分な比較にしかならないが、製塩土器がまとまって出土している下ノ坪遺跡、西分増井遺跡の土坑出土遺物で比較を試みる。まず、Ⅰ-2～3期に比定される下ノ坪遺跡SK16・18、西分増井遺跡SK1・6・8では、製塩土器は出土しているが少量である。しかしⅠ-4～7期（Ⅰ-4～5期：下ノ坪遺跡SK28・30、西分増井遺跡SK9・15 / Ⅰ-6・7期：下ノ坪遺跡SK21・33・34、西分増井遺跡SK3・5・16）中でもⅠ-6・7期には多量の製塩土器が、土坑に廃棄される状況がみられる。後続する期になると、同様の性格をもつ廃棄土坑である西分増井遺跡のSK2・4、また土坑ではないが下ノ坪遺跡のSA4やP14・15でも製塩土器の出土は急激に少なくなる。報告者に依れば⁽⁸⁾、土佐における古代の土器様相を供膳具からみて、Ⅰ-2～3期を1段階、Ⅰ-4～7期を2段階、Ⅲ期を3段階とし、2段階前半は「南四国における律令的土器様式の頂点を示す」段階、3段階は「平安時代前期における新しい土器様相の成立期」とし、Ⅲ期3段階への転換は律令的土器様式の払拭として捉えられている。土佐における製塩土器の出土のピークはこの第2段階にあたり、まさに当地の律令的土器様式とその消長を同じくしていると言える。

（註）

（1）高知県野市町教育委員会『下ノ坪遺跡』1998年

（2）a．高知県教育委員会／(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『具同中山遺跡群』2001年

b．高知県教育委員会／(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『具同中山遺跡群Ⅲ』2002年

（3）(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『小籠遺跡』1996年

（4）近藤義郎『土器製塩の研究』青木書店 1984年

（5）大久保徹也「古墳時代以降の土器製塩」『吉備の考古学的研究』（下）山陽新聞社1992年

（6）岸本雅敏「古代国家と塩の流通」『古代史の論点 都市と工業と流通』小学館1998年

（7）（6）に同じ

（8）池澤俊幸「南四国における古代前期の土器様相 - 下ノ坪遺跡の成果を中心として - 」「下ノ坪遺跡」高知県野市町教育委員会 1998年

（9）関川 妥「第4章 結語」『浜田遺跡・脇ノ浦遺跡・こうしんのう2号墳』（財）北九州教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1994年

- (10) 内面に布目が観察できないが、「非型作り成形」といえる「手づくね」を示す確証もなく、「型作り」であっても成形手法に違いがみられる可能性を考慮する必要がある。
- (11) 二次焼成を受けていない製塩土器について、註(3)によると「内外面とも同じような灰白色、まれに淡黄褐色を呈しているところから、二次的加熱を受けていない、つまり製塩煮沸に未使用であると判断し、製塩地へ製塩土器を供給する土器生産地と考えている。」とされている。
- (12) 高知県野市町教育委員会『曾我遺跡発掘調査報告書』1989年
- (13) (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『奥谷南遺跡』2000年
- (14) (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『西鴨地遺跡』2001年
- (15) 高知県大方町教育委員会『竹シマツ遺跡 宮崎遺跡』1992年
- (16) 高知県教育委員会『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書 風指遺跡 アゾノ遺跡』1989年
- (17) 出原恵三「第5章 まとめ」『白猪田遺跡』高知県南国市教育委員会 1997年
- (18) 1996年～2001年に調査された田村遺跡群発掘調査のF4区で確認されている。
- (19) (9) に同じ
- (20) 福岡市教育委員会『海の中道遺跡』1982年
- (21) (6) に同じ